20日　土曜

列王Ⅱ

13:14 エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父、わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫んだ。
13:15 エリシャが王に「弓と矢を持って来なさい」と言ったので、王は弓と矢をエリシャのところに持って来た。
13:16 エリシャはイスラエルの王に「弓に手をかけなさい」と言ったので、王は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上に置いて、
13:17 「東側の窓を開けなさい」と言った。王が開けると、エリシャはさらに言った。「矢を射なさい。」彼が矢を射ると、エリシャは言った。「【主】の勝利の矢、アラムに対する勝利の矢。あなたはアフェクでアラムを討ち、これを絶ち滅ぼす。」
13:18 それからエリシャは、「矢を取りなさい」と言ったので、イスラエルの王は取った。そしてエリシャは王に「それで地面を打ちなさい」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。
13:19 神の人は彼に激怒して言った。「あなたは五回も六回も打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを討って、絶ち滅ぼすことになっただろう。しかし、今は三回だけアラムを討つことになる。」
13:20 こうして、エリシャは死んで葬られた。モアブの略奪隊は、年が改まるたびにこの国に侵入していた。
13:21 人々が、一人の人を葬ろうとしていたちょうどそのとき、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去って行った。その人がエリシャの骨に触れるやいなや、その人は生き返り、自分の足で立ち上がった。
13:22 アラムの王ハザエルは、エホアハズの生きている間中、イスラエル人を虐げたが、
13:23 【主】は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のゆえに、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼らを滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで、御顔を背けて彼らを捨てることはなさらなかった。
13:24 アラムの王ハザエルは死に、その子ベン・ハダドが代わって王となった。
13:25 エホアハズの子ヨアシュは、その父エホアハズの手からハザエルが攻め取った町々を、ハザエルの子ベン・ハダドの手から取り返した。ヨアシュは三度彼を打ち破って、イスラエルの町々を取り返した。

ヨアシュは偶像に仕える悪王ではありましたが、神の存在や預言者の力は信じていたようです。困った時のみだったかもれませんが、現代にもそのようなクリスチャンらしき人は教会にいるかもしれません。また自分自身の信仰が、困った時に頼るだけの信仰になっていないか、考えてみるべきでしょう。

ヨアシュは地面を3回しか打ちませんでしたが、これは色々な理由が考えられます。一つには、それほど多く苦難が来るとは思わなかったのでしょう。二つめには、適当なところで終わらせても良いだろうと、軽く考えていたのかもしれません。三つ目には、戦と地面を打つことは関係ないだろうという考えです。

どれももっと真剣にこのことに取り組むなら、結果は変わっていたでしょう。主がことを行ってくださるのですから、真剣に信じて、主の御手を動かすように、取り組むべきです。信仰を表すことは、現実とは関係ないような気がしますが、そこに信仰が表れるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？